

# 小学校英語活動と中学校英語科の効果的な接続について

## ～中学校入門期の工夫を中心に～

中 釜 智 子

### はじめに

文部科学省「小学校英語活動実施状況調査（平成18年度）」によると、全国の公立小学校での英語活動実施割合は95.8%で、前回調査（平成17年度：93.6%）と比べ2.2ポイント増えている。また、Benesse教育研究開発センターの調査（平成18年）でも、「何らかの形で英語教育を行っている」と回答した小学校は94.0%に上っており、ほとんどの公立小学校で、何らかの形で英語教育を行っており、その数は増加傾向にあるという現状が見て取れる。

中央教育審議会は平成18年2月の審議経過報告で、小学校段階における英語教育を充実するために「義務教育としての機会均等を確保するため、仮にすべての小学校で共通に指導するとした場合の指導内容を検討中」であることを報告した。しかし具体的な内容や方法等についての答申は未だ出ていない。

このように多くの小学校で英語活動が行われているのだが、現時点では学習指導要領に明示された共通の指導内容があるわけではなく、またその実施方法も様々である。このため、技能面でも意欲面でも以前に比べ多様なレディネスをもった生徒が中学校に入学してくるようになった。個々のもつ様々なレディネスを考慮に入れながら、生徒の英語学習やコミュニケーションへの関心・意欲を喚起し、スキルの習得を図ることが、中学校のとりわけ入門期において重要になってきている。

本稿では、この現状をふまえ、中学校入門期の実践例と実態調査をもとに、小学校英語活動と中学校英語科の効果的な接続を図るためにはどのような工夫ができるかを考えたい。

## 1. 中学校における入門期の工夫

### (1) 小学校での英語活動の実態調査から

現在のように多くの小学校で英語活動が行われるようになる以前、英語を学校外で学んできた児童を除けば、中学校に入学する生徒の英語学習に対するレディネスはほぼ同等のものであった。多くの生徒が中学校に入って初めて英語を学習するのであり、既習者に配慮しつつ、「英語でのあいさつ」や「英語の音声に慣れる」ことから始めることが一般的であった。

しかし現在では、「英語でのあいさつ」や「英語の音声に慣れること」は多くの小学校で行われている。そのため、従来の中学校入門期の内容では新鮮味が欠け、生徒の興味を喚起しづらいということが起こってきた。また、出身小学校によって経験してきた英語活動が異なり、一人ひとりの個性も合わせると多種多様なレディネスをもった生徒が入学してくるようになっている。話したことがある／聞いたことがある英語も同一ではないし、その中で自然に身についた語彙や表現も異なる。もちろん身に付いている度合いもそれぞれである。英語に対する「好き／嫌い」を中学校入学時に既に持っている生徒も見られる。以前は、中学校の授業で学習する英語や、英語を用いたコミュニケーション活動はほとんどの生徒にとって初めての経験であった。しかし現在では、初めてその英語にふれる生徒と既に同じような活動を小学校でも経験している生徒が同じ教室に混在していることも多い。

特に入門期には「もう知っている」「もうできる」生徒と、「初めて知る」「初めてやってみる」生徒の差が、関心・意欲・態度に大きく影響を及ぼすことがある。そのため、特段の配慮や工夫をする必要がある。

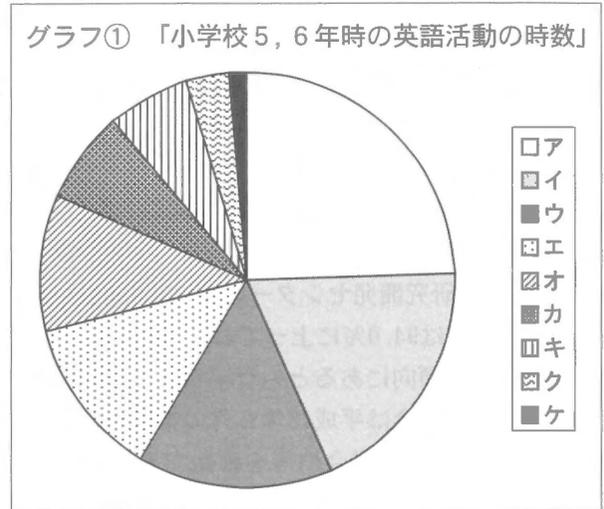
本校は例年30～40の小学校から新生を迎えてきた。そのため、それぞれの小学校で多種多様

な英語活動を経験してきた生徒が、1つの教室で同時に「入門期の英語学習者」として学習をすることになる。まず、その実態を質問紙法によって調べた。(対象：1年生152名 平成19年1月実施)

① 時 数

小学校5、6年生の時の英語活動の時数について尋ねたところ、多かった順に次のような結果であった(表① グラフ①)。

「まったくなかった」「ほとんどなかった」を合わせると43.4%と半数近く、その一方で「週1時間程度」「月2時間程度」「毎日短時間」のようにほぼコンスタントに英語活動があった生徒も20.4%おり、時数の面から見ても大きなばらつきがあることがわかった。



表①「小学校5、6年時の英語活動の時数」

円グラフ記号	時 数	パーセンテージ(%)
ア	全くなかった	24.3
イ	ほとんどなかった(年1~2時間程度あった)	19.1
ウ	学期1~2時間程度あった	15.1
エ	月1時間程度あった	12.5
オ	週1時間程度あった	10.5
カ	その他	7.2
キ	月2時間程度あった	6.6
ク	毎日短時間(5~10分)あった	3.3
ケ	まとめてあった	1.3

② 活動内容

次に、小学校5、6年で英語活動が「あった」と回答した115人(回答者全体の75.7%)に、どのような活動をしたか尋ねたところ、次のような結果であった。(複数回答)(表②)

表②「小学校英語活動で行った活動」

活 動 内 容	人 数
A L Tの先生との活動	64
A L Tの先生以外の、外国の人との交流	31
英語を使った遊びやゲーム(カルタ、ビンゴ、ツイスター、色鬼 等々)	86
英語の歌	75
英語劇	26
アルファベットを言う	41
アルファベットを書く	18
英単語を言う(スポーツ、色、食べ物、数、動物 等々)	77
英単語を書く	9
英単語を聞いて理解する	43

書いてある英単語を読んで、理解する	17
英語を使った会話（あいさつ、自己紹介、好きなもの 等）	70
場面設定をしての英会話（買い物、入国審査 等々）	36
英語の絵本等の読み聞かせ	25
その他	10

半数以上の生徒が経験していた活動は、多い順に ①英語を使った遊びやゲーム（カルタ、ビンゴ、ツイスター、色鬼 等々）、②英単語を言う（スポーツ、色、食べ物、数、動物 等々）、③英語の歌、④英語を使った会話（あいさつ、自己紹介、好きなもの 等）、⑤ALTの先生との活動であった。いずれも音声中心に楽しく遊んだり表現したりするもので、ALTの先生との活動も55.7%の生徒が経験している。反対に少なかったのは ①英単語を書く、②書いてある英単語を読んで、理解する、③アルファベットを書く であった。文字を書くことや文字を読んで理解する活動は少ないということがわかる。なお、「その他」としてはビデオやテレビの英語番組を視聴する等があった。

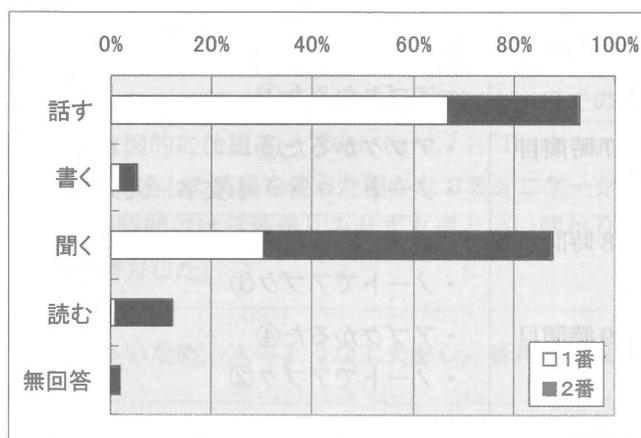
### ③ 使用技能

「話すこと」「書くこと」「聞くこと」「読むこと」の四技能について、小学校の英語活動で多く使用したものはどれかという質問をした。それに対する回答からも、音声領域である「話すこと」「聞くこと」を中心にした活動が行われており、文字領域である「書くこと」「読むこと」の活動はほとんど行われていないことがわかる。（表③ グラフ②）

表③「小学校英語活動で多く使用した技能」

技 能	1 番	2 番
話 す こ と	77人	30人
書 く こ と	2人	4人
聞 く こ と	35人	66人
読 む こ と	1人	13人
無 回 答	0人	2人
合 計	115人	115人

グラフ②「小学校英語活動で多く使用した技能」



### (2) 中学校入門期の実践

このように、入門期でありながら生徒の英語学習に対するレディネスには大きな差があるのが現状である。特に、上述の実態調査から、小学校英語活動経験者は、未経験者が全ての技能領域に関してほぼ白紙の状態であるのに対して、「音声面ではある程度慣れているが、文字領域は未経験者とほぼ同じ経験量である」という特徴を持っていると推測される。そこでこれらの各個人のレディネスの違いに配慮しつつ、飽きずにかつ意欲を持って学習内容の定着が図れるよう工夫する必要がある。

そこで、特に次の4点に重点を置いて入門期の指導を行うこととした。

- ・学習者のレディネスの差をマイナス要素ととらえず、いかに生かすかを考えること
- ・英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ時間を多くとること
- ・音声から文字への移行がスムーズに行えるよう配慮すること
- ・文字の学習を始めてから、文字が定着するまでの学習活動を段階的に工夫すること

① 最初の12時間

具体的には、平成18年度の1年生では、教科書に入る前に12時間の英語の音声に慣れ親しむ時間をとり、その中で次第に文字にも慣れるようにした。

ア 学習活動の内容と主に使用する技能

時 間	学 習 活 動	主に使用する技能			
		話す	聞く	書く	読む
1時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ガイダンス</li> <li>・学習の仕方</li> <li>・テキスト配布 記名チェック</li> <li>・Here you are. Thank you.</li> <li>・はじめと終わりの挨拶</li> <li>・I'm ..... Nice to meet you. で握手</li> </ul>	○			
2時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・I'm..... This is .....ゲーム</li> <li>・Nice to meet you. ゲーム</li> <li>・自己紹介</li> </ul>	○			
3時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作業 (アルファベットカード作り)</li> </ul>	○	○		
4時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アルファベットカードを使って①</li> </ul>	○	○		○
5時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アルファベットカードを使って②</li> <li>・アブク読みCH</li> <li>・ペンマンシップ (以後各自)</li> </ul>	○	○		○
6時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大文字 ヘボン式ローマ字 名前CH</li> <li>・アブクかるた①</li> </ul>	○	○	○	
7時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アブクかるた②</li> <li>・ノート・・・小文字 大文字 名前</li> </ul>	○	○	○	
8時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アブクかるた③</li> <li>・ノートでアブク①</li> </ul>	○	○	○	
9時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アブクかるた④</li> <li>・ノートでアブク②</li> </ul>	○	○	○	
10時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アブクで単語①</li> <li>・アブクかるた⑤</li> <li>・ノートでアブク③</li> </ul>	○	○	○	○
11時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アブクで単語②</li> <li>・アブクで単語③</li> <li>・ノートでアブク④</li> </ul>		○	○	○
12時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アブクで単語④</li> <li>・肯定文 疑問文 否定文</li> <li>・ゲーム (クリスクロス)</li> </ul>	○	○		○

イ 仲間作りの視点から

共に学ぶ級友との関係作りは、学年当初にまず必ずしなくてはならないことである。英語の授業でも、この視点を持って意図的に学習活動を仕組んでいった。例えば、まず1時間目

の記名チェックでは隣同士で教科書、ノート、テキスト等への記名をチェックし合うのだが、その際、"Good!" "OK!" "Thank you!" というやりとりを入れて行うように指示する。事前に発音練習（「今までにこの表現を知っている人は、発音をブラッシュ・アップする気持ちでやろう。」と言って/th/の指導を入念に行うと小学校での既習者の関心もひきやすい）や気持ちを込めて言う練習（「英語は気持ちを込めてちょっとオーバーかなと思うくらいで言うとかっこいいよ。」）をしてから行くと、生徒は英語を言う練習をしている勢いの中で自然に友好的なやりとりをするようになる。思春期の入口ということもあり、普段は友達に対してほめたりお礼を言ったりすることがない生徒でも、英語だと言えるとということがある。これを最大限に活用して仲間作りにつなげていこうとした。

また、1時間目から配布物を意図的に準備し、ものを手渡すときの"Here you are." "Thank you." の表現も入門期で定着を図った。1時間目からこの表現が定着するまでの間は毎時間、配布物を用意するか、あるいはものを手渡す場面を作り、生徒が意識していなくても英語の時間にもものを手渡す場面では自然に"Here you are." "Thank you." が口をついて出てくるようにした。動作にちょっとした一言を添えることで、英語授業の雰囲気作りや級友同士の温かな関わりの一助となった。

1, 2時間目は英語教室開きと仲間作りの時間として、「I'm ..... "Nice to meet you." で握手」や、「I'm..... This is .....」と次々に自己紹介と友達紹介をしていくゲーム、「Nice to meet you. ゲーム」、自己紹介等、これから共に1年間を過ごす級友と知り合い、関わり合う活動を多く取り入れた。また3時間目以降も、英語でのやりとりを含んだ形での班活動やペア活動を意図的に数多く仕組んでいき、英語の学習をしている中で自然と仲間作りができていくように配慮した。例えば3時間目のアルファベットカード作りもペアで協力し合って行うように仕組み、「Can I use this?」という表現を学習しているように見えて実は友達にものを頼むときの表情や口調の練習にもなっている、というような工夫をした。それに続くアルファベットカードを使っての学習活動においても、隣同士や班での活動後には各自のカードが混ざっているように意図的に仕組み、「Your card. "Thank you!" のやりとりが生ずるようにする等、入門期に、友達との英語を使った温かなコミュニケーションを図る態度を育成するよう配慮し、「英語の時間には言葉惜しみせず友達といい関わりをもつ」という英語教室文化が醸成されるよう努力した。

#### ウ 音声から文字への移行

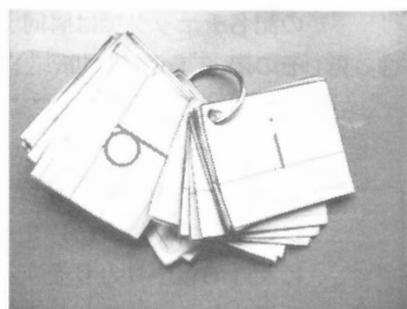
入門期には、文字がハードルとなることが多いため、次のような工夫をし、音声から文字への移行がスムーズに行えるよう配慮した。

- ・入門期の文字の学習では特にゲーム要素の大きい学習を多く取り入れ、楽しみながら学習の定着を図ることができるようにした。
- ・文字の持つ音（「アブク読み」）の指導を時間をかけて行い、音声と文字の関連に着目させるようにした。
- ・いきなり「書く」活動に入るのではなく、文字をその文字として認識する学習活動を、アルファベットカードを使って内容を変えながら段階的に行っていき、文字をその名称（「アルファベット読み」）と一般的な音声（「アブク読み」）で認識できるようになってから、書く活動につなげた。この活動の具体例についてはエで後述する。
- ・使用頻度の高い小文字から先に導入した。
- ・大文字は、必要性が実感できるよう、自分の名前の表記から導入した。
- ・頻繁にノート確認を行い、安心感をもって書く活動を進められるようにした。

エ アルファベットカードを使っての実践

○作業（アルファベットカード作り）

- ・アルファベットの小文字カードの材料を2色で1組ずつ用意する黄色シート 緑色シート リング
- ・隣同士で協力しながらシートを切ってカードを作り、左上にパンチで穴をあけて、リングで止める。
- ・"Can I use this?" "Sure." "Thank you."  
"You're welcome." "Good job!"等



資料① アルファベットカード

○アルファベットカードを使って①

- ・アルファベット順に並べる
  - ・教師が言うアルファベット（「アルファベット読み」）を聞いて、そのカードをとる
  - ・カードを見て、その文字を「アルファベット読み」する
- 教師が言うアルファベット（「アブク読み」）を聞いて、そのカードをとる

○アルファベットカードを使って②

- ・アルファベット順に並べる
- ・教師が言うアルファベット（「アルファベット読み」）を聞いて、そのカードをとる  
また、その際、混同しやすい文字を集中して扱う（例：aとu, bとdなど）
- ・カードを見て、その文字を「アルファベット読み」する
- ・ペアでチェックし合い、"Good job!" "Thank you."
- ・教師が言うアルファベット（「アブク読み」）を聞いて、そのカードをとる  
また、その際、混同しやすい音声と文字を集中して扱う（例：mとn, bとvなど）
- ・カードを見て、その文字を「アブク読み」する（1文字→複数文字へ 例：n→en→pen）
- ・ペアでチェックし合い、"Good job!" "Thank you."

○アブクかるた①～⑤

- ・隣同士、ペアの相手をかえて、班対抗等、対戦相手を変えながら、教師が言うアルファベット（「アブク読み」）を聞いて、そのカードをとる（1文字→複数文字へ）
- ・それまでに耳慣らし／口慣らししてきた表現の活用 "Here you are." "Thank you." 等
- ・命令文の耳慣らし "Boys, use your green cards. Girls, use your yellow cards."  
"Exchange your seats." "Go back to your seat." 等
- ・数や数を尋ねる表現の耳慣らし "How many cards do you have? One, sit down please. Two, sit down please. . . ."等

\*動作を伴う活動は、生徒が英語の意味を推し量りやすく、既習者と未習者の差が出にくいので入門期の生徒が安心感をもって取り組みやすい。

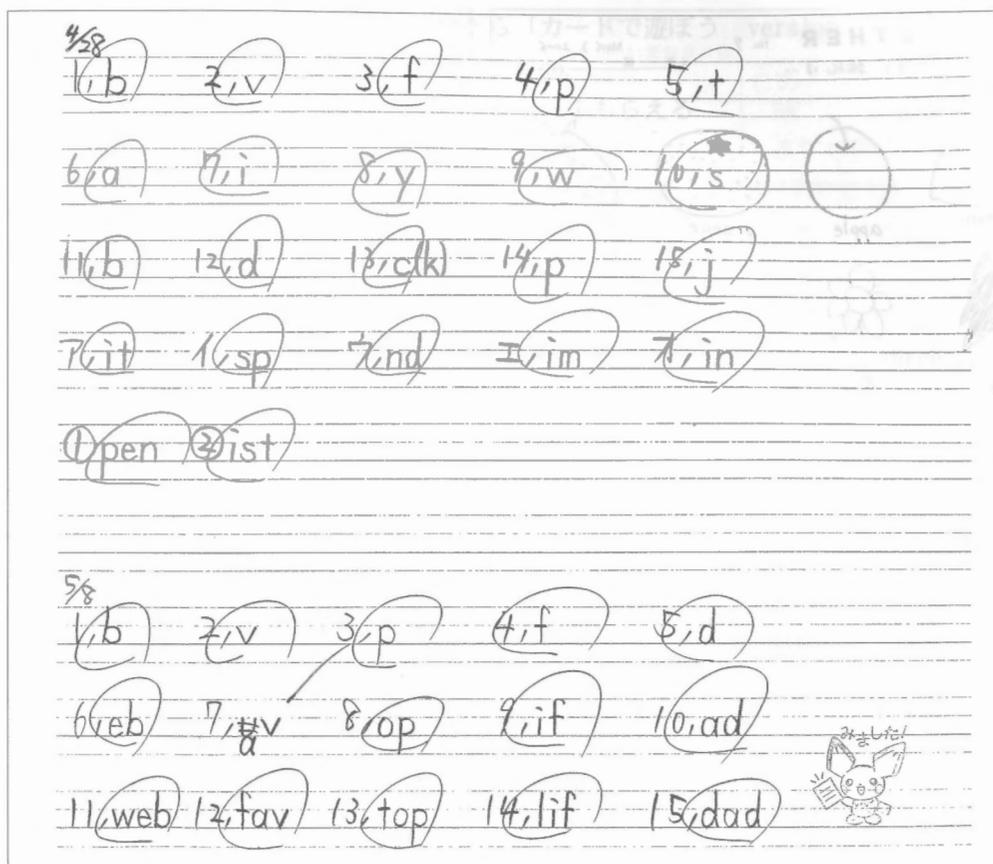
\*1年生1学期に学習する表現や文法事項を、この活動の中で耳慣らししておく。そうしておくことで、教科書を使っての学習の際、次の2点で効果がある。

- ・理解から表現へとつなげやすく、文法の知識理解が定着しやすい。
- ・「こういうときに使うのだ」という実感が得やすい。「知っているも使えない」のはその表現をどういう場合に使うのかの実感の欠如と体験の不足に起因することが多いので、体験を伴った実感を大切にしたい。

○ノートでアブク①～④

十分にカードでの活動を行った後、書く活動に入る。

- ・教師が言うアルファベット（「アブク読み」）を聞いて、文字を書く。（1文字→複数文字へ）



生徒のノート

○アブクで単語①②③④

- ・「アブク」読みで発音できる単語を発音してみる。
- ・sh, chなどの発音や、母音字+子音字+eなどの発音のルールについても段階を追って指導する。

② 13時間目以降の実践 ～ カードを用いて

(2) の冒頭で述べたように、入門期の指導で特に重点を置いたことに「音声から文字への移行がスムーズに行えるよう配慮すること」と「文字の学習を始めてから、文字が定着するまでの学習活動を段階的に工夫すること」がある。最初の12時間である程度文字に親しんだところで、文字の定着と基礎的な文法事項の導入を目的にカードを用いてのゲームを交えた学習に取り組んだ。

ア 学習の流れ

- 「カードで遊ぼう」で使う絵札を知る
- カードを見て英語で言えるようになる
- 「カードで遊ぼう version 1」

相手の手札を指して Is this a/an ~? Yes, it is. → そのカードをもらえるはじめはパートナーを指定。慣れてきたら自由に席を立つて行う。

- 「カードで遊ぼう version 1」に慣れてきたら、その日にゲットした絵札を報告する文をノートに書く活動を始める。

そのために

- ・・・報告文を書くためのノート作り

英語通信 **TOGETHER** No. 7 May( ), 2006  
 「カードで遊ぼう」で使う 絵札は... 1年 組

lemon apple orange strawberry  
 tree flower notebook book  
 glass cup table (一といふはいい!) chair  
 album pencil pen

英語通信 **TOGETHER** No. 10 June ( ), 2006  
 1年 組

**カードゲーム ver.2に進化!!!**

尋ね方  
**Do you have any trees?**

答え方  
**Yes, I do.**  
**No, I don't.**

～メモ～

参考: カードゲーム ver.1  
 尋ね方 (例) Is this a tree?  
 答え方 (例) Yes, it is.  
 No, it isn't.

★ 「動詞は動詞同士」で尋ねたり答えたりすることを忘れずに!  
 ★ 報告文を確実に書けるようにしよう  
 ・ 1枚なら・・・  
 ・ 2枚以上なら・・・  
 ・ その他英文を書くときの約束事は・・・

ワークシート

- ・「カードで遊ぼう」絵札紹介のワークシートを見て、正しく英単語を視写できるようになる
- ・ a/anをつけた場合と複数形をノートに書く
- ・ 報告文の書き方の約束を知る  
 最初に黒板を見て日付を写す  
 I have ~ . の表現で書く  
 自分で作ったノートを見ながら書く (数は教科書のページを見る)
- ・ 毎時間ノートチェックをする

○報告文を書く活動に慣れたら、口頭で報告する活動を始める  
 そのために・・・複数のsの発音の仕方を知る

日付 June 2  
 I have a tree, an orange, and three apples.

日付 June 13  
 I have a pen, a lemon, and three cups.

日付 June 6  
 I have a pencil, an orange, a book, a notebook,  
 a tree, an album, a flower, a lemon, a strawberry,  
 and two apples.

日付 June 13  
 I have three cups, two lemons, and a pen.

日付 June 16  
 I have two trees, a notebook, a cup, a strawberry,  
 and a pen.

カードゲームの報告文

- 「カードで遊ぼう version 1」に慣れたら「カードで遊ぼう version 2」に進む  
相手に Do you have any ~? Yes, I do.  
→ 相手の持っているその絵札全てをもらえる  
報告文についてはversion 1と同様に行う

イ この活動のねらい

- ・友達との英語のやりとりを楽しむ

Is this ~? Do you ~? Here you are. Thank you. 等

- ・数の表現に親しむ

Take five cards. How many cards do you have now? One, two, three ... 等

- ・命令文の表現に親しむ

Stand up. Sit down, please. Go back to your seat. 等

- ・冠詞a/anや複数形に触れ、親しむ

- ・be動詞の文と一般動詞の文の応答に意識を向ける（意識して応答できるようにする）

- ・日付を英語で書くことに慣れる

○ゲームの中でその日に自分がゲットした札を報告するために英語を書くという活動内容にし、書く「勉強」をしているという意識になりにくいよう配慮した。

○ゲットしたカードの枚数や種類によって書く英文が異なるため、一斉に活動していても個人の書く力の差や作業スピードがあらわになりにくいようにした。

○ゲーム活動に取り組む中で必要に迫られて、書く活動や文法事項・言語事項に触れるように仕組み、その内容を知りたい、できるようになりたいという意欲づけを図った。

○教科書で学習する前に、カードを用いた活動に取り組む中で自然にその表現や文法・言語事項に触れ、親しむように意図的に仕組み、教科書で出てきたときには、「ああ、あの表現だな。」とわかるようにした。教科書での導入の際も「カードゲームの時言っていたあの表現」という説明をすると比較的わかりやすく、書くことを苦手とする生徒でも音声の記憶を頼りに書く活動に取り組むことができた。

○毎日短時間繰り返し行うことによって、定着を図った。

## 2. 実態調査から

### (1) 小学校で経験した英語活動と中学校英語科評価との関連

#### ① 時数との関連

小学校で経験してきた英語活動の時数が多様であることは1. (1) ①で述べたとおりであるが、それでは小学校での英語活動の時数と中学校英語科での評価の間に関連性は見られるのだろうか。「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「話すこと」「書くこと」「聞くこと」「読むこと」「言語・文化への知識・理解」の6観点について、第1学年終了時にどの程度目標を達成できていたかを元に調査した。

それぞれの観点について「概ね満足」をB・「十分満足」をA・「努力を要する」をCとした場合の、Aと評価された観点の数と小学校での英語活動の時数の関係は以下のものであった。(グラフ③)

これを見ると全ての時数帯に6観点でA評価の生徒が存在する。小学校での時数の多寡によってA評価が増減するわけではないようである。ただし、この調査は小学校での英語活動について質問したもので、学校外の英会話教室等での経験は回答に含まれていないことにも注意する必要があるだろう。

次にこれを「毎日短時間あった」「週1時間程度合った」「月1時間程度あった」「月2時間程度あった」と回答した「コンスタントにあった」グループと、「ほとんどなかった」「まった

くなかった」と回答したグループに分けてみると、結果は次の通りであった。(グラフ④)

6 観点のうち、半数の 3 観点以上で A と評価された生徒については、「コンスタントにあった」グループと「ほとんど/まったくなかった」グループに大きな差は見られない。その一方で、A 評価が 2 観点以下では、「ほとんど/まったくなかった」グループが大きい割合を占めている。

② 使用技能との関連

「話すこと」と「聞くこと」の評価と、小学校での英語活動で主に使用した技能との関連を見ると、次のようであった。(表④, ⑥)

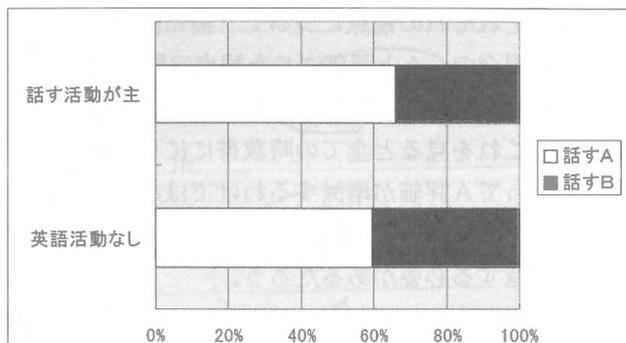
ア 表④ 「話すこと」の評価と小学校英語活動で主に使用した技能との関連

主に使用した技能	A の人数	B の人数	C の人数
話 す こ と	51	26	0
書 く こ と	0	2	0
聞 く こ と	25	10	0
読 む こ と	0	1	0
英 語 活 動 な し	22	15	0

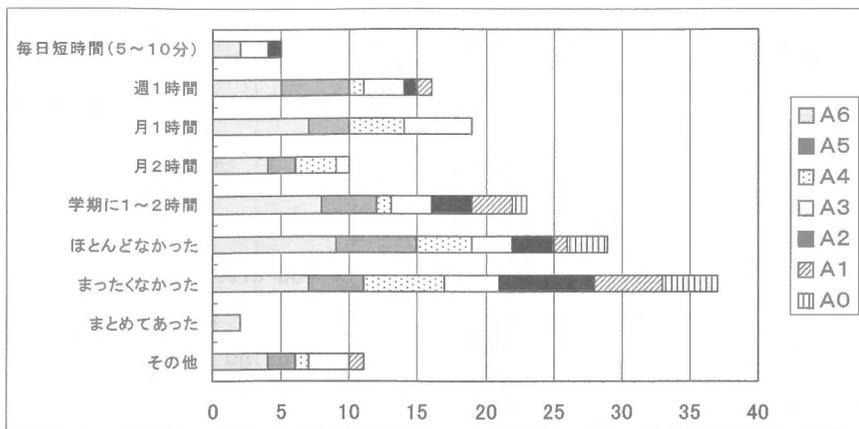
小学校英語活動で「話す活動が主であった」と回答した生徒と、英語活動を経験していない生徒の間で「話すこと」の評価に差があるかどうかを割合で見ると次の通りである。(表⑤, グラフ⑤)

主な使用技能	A	B
話すこと	66.2%	33.8%
活動なし	59.5%	40.5%

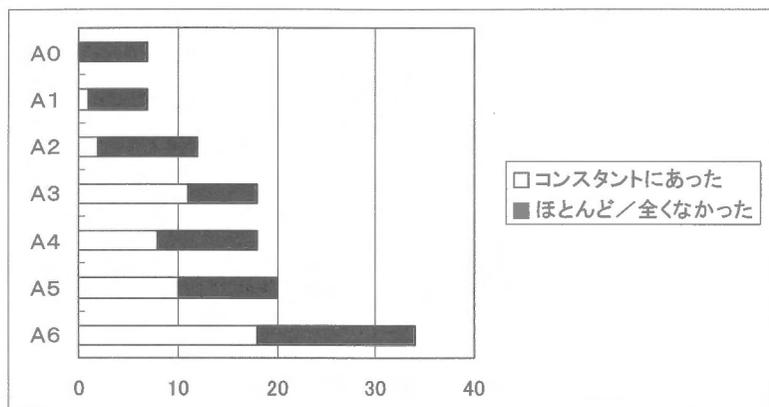
表⑤ 「小学校での使用技能と評価 (話すこと)」



グラフ⑤ 「小学校での使用技能と評価 (話すこと)」



グラフ③ 「小学校英語活動の時数と中学校での A 評価観点数～その 1」



グラフ④ 「英語活動時数と A 評価数～その 2」

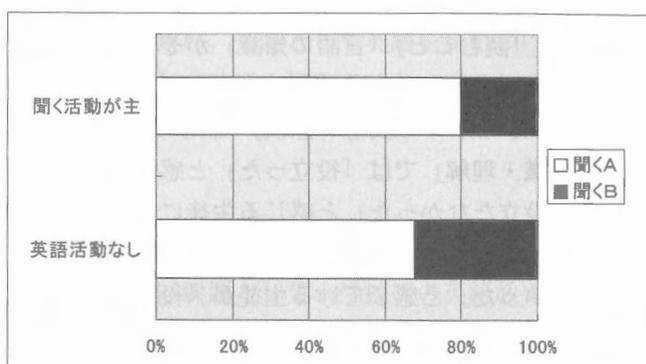
イ 表⑥「聞くこと」の評価と小学校英語活動で主に使用した技能との関連

主に使用した技能	Aの人数	Bの人数	Cの人数
話すこと	65	12	0
書くこと	1	1	0
聞くこと	28	7	0
読むこと	1	0	0
英語活動なし	25	12	0

小学校英語活動で「聞く活動が主であった」と回答した生徒と、英語活動を経験していない生徒の間で「聞くこと」の評価に差があるかどうかを割合で見ると次の通りである。(表⑦、グラフ⑥)

主な使用技能	A	B
聞くこと	80.0%	20.0%
活動なし	67.6%	32.4%

表⑦「小学校での使用技能と評価(聞くこと)」



グラフ⑥「小学校での使用技能と評価(聞くこと)」

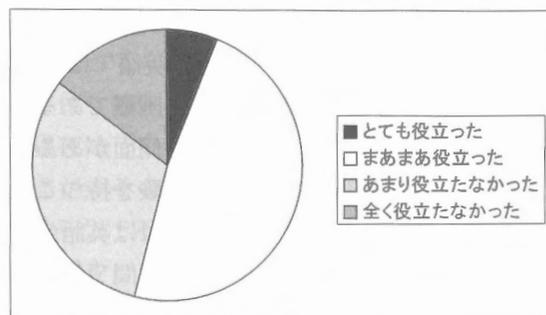
これらのア、イの結果を見ると、「話すこと」については、小学校での活動の有無によって中学校での「話すこと」の能力に大きな差は見られない。「聞くこと」についての方が、小学校で活動した場合と活動がなかった場合の中学校でのA評価の割合の差がやや大きい。「聞くこと」の方が「話すこと」よりも小学校での活動の影響がやや大きいことが伺えるのではないだろうか。

(2) 中学校英語科学習に対する小学校英語活動の有用感

次に、小学校で「英語活動があった」と回答した生徒に、その英語活動が中学校での英語学習に役立ったと感じるかどうかについて質問したところ、次のような結果が得られた。(表⑧ グラフ⑦)

有用感	人数
とても役立った	7
まあまあ役立った	55
あまり役立たなかった	36
全く役立たなかった	17
合計	115

表⑧「小学校英語の有用感」



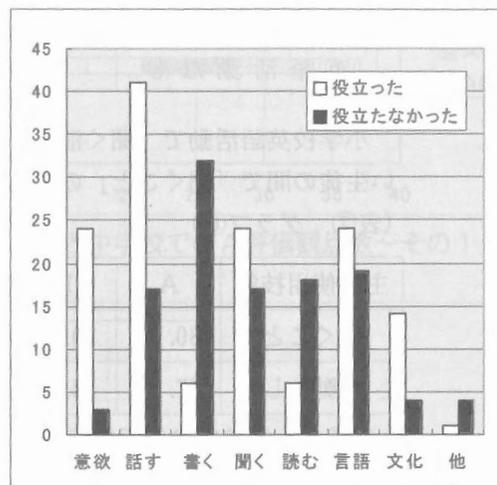
グラフ⑦「小学校英語の有用感」

また、「英語によるコミュニケーションへの関心・意欲」「話すこと」「書くこと」「聞くこと」「読むこと」「言語の知識」「文化への知識・理解」の観点のうち、どの観点で「役立った/役立たなかった」と感じるかを問うたところ、結果は次の通りであった。(表⑨ グラフ⑧)

	意欲	話す	書く	聞く	読む	言語	文化	他	回答数
役立った	24	41	6	24	6	24	14	1	140
役立たなかった	3	17	32	17	18	19	4	4	114

表⑨「観点別有用感」

これを見ると、「役立った」と感じているのは「英語によるコミュニケーションへの関心・意欲」「話すこと」「聞くこと」「言語の知識」「文化への知識・理解」で多く、「役立たなかった」と感じているのは「書くこと」が最も多く、「話すこと」「聞くこと」「読むこと」「言語の知識」がそれに続いている。また、有用感の差で見ると、「英語によるコミュニケーションへの関心・意欲」「話すこと」「文化への知識・理解」では「役立った」と感じている生徒が「役立たなかった」と感じる生徒に比べて特に多く、反対に「書くこと」と「読むこと」では「役立たなかった」と感じている生徒が「役立った」と感じる生徒に比べ特に多い。「聞くこと」と「言語の知識」については「役立った」と感じる生徒と「役立たなかった」と感じる生徒がほぼ同程度いた。



グラフ⑧「観点別有用感」

また、自由記述で「小学校での英語活動について、自分の経験から『このようにしたらいいのではないか』という意見があれば」と問うたところ、「少しずつ頻繁に／毎日やったらいいと思う」という意見と「書くこともしたらいい」という意見が多く見られた。

### 3. 今後の課題

小学校の英語活動の今後は未だ定まっていないが、現在の状況から、次のようなことが今後の小学校英語活動を考えるうえで課題としてあげられるのではないだろうか。

#### (1) 小学校英語活動でも文字に触れる経験を持つ（習得は目指さない）

現在の中学校英語でも、文字をいつどのように入れていくかは大きな課題であるが、いずれにせよ音と文字に慣れる時間を現在より長くする必要があるのではないだろうか。どれだけ工夫をしたとしても、現在の中学校英語では1学期中音声だけで文字を取り入れずに授業を進めるのは、その後の学習内容を考えると困難である。1～2ヶ月の間での、音声から文字への急激な段差が英語を難しく感じさせている側面があることは否めない。小学校から、文字の習得を目指すのではなく、文字に慣れ親しむ経験を持つことは音声と文字の段差をなだらかにするために有効なのではないかと考える。またこれは英語学習のみの問題ではないのでは、という視点もまた必要であろう。音声言語と文字言語の間で得意不得意が生ずる場合、その生徒の持つ情報処理の特徴が音声優位のものであるか視覚優位のものであるか等の視点を取り入れ、一人ひとりの個性に合わせた学習方法や学習材を用意することも検討する必要がある。

#### (2) 子どもの「適期」を大切に

築道(2006)が講演「小学校の英語活動を展望するー中学校の英語教育との関連を中心にー」(2006.12.25.島根大学)で「児童期は言葉を体験として味わう適期である」と述べているように、中学校よりも小学校で取り組む方が子どもにとっても楽しく有効である活動は小学校で行うよう

にした方が良く考える。例えば“Simon says”等の身体を使うゲームや易しい英語の歌は小学校で行う方が効果的であろう。小学校では特にリズムと音声を楽しむ活動を多く取り入れ、英語を身体で味わい楽しむ経験を積む。それが中学校英語への意欲の面でも、音声言語としての技能・能力の面でも効果的ではないだろうか。

また、小学校でも英語活動をしていると「英語でどうなのか知りたい」という声がよく出てくる。意欲があるときに適期であるとも言える。この機を捉えて小学校で辞書の紹介をすることも検討すべきではないだろうか。いわゆる「辞書指導」は中学校で行うとしても、使い方を紹介し、教室に置いて使いたい人は使える環境を整備するだけでも効果があると考えられる。

### (3) やりとりのある活動を大切にす

英語はコミュニケーションのための手段である。中学校でも同様であるが、ぜひ子ども同士や大人と子どもでのやりとりのある活動を多く取り入れたい。知識として英語を身につけるのではなく、生きてつながる、関わり合いのためのツールとして英語を捉えさせたい。そして英語でのやりとりを通して、人との関わりを大切にし、楽しめる子どもに育てていきたい。

## 5. 終わりに

平成19年6月の教育再生会議第二次報告には小学校に英語教育を導入することが盛り込まれた。また平成19年12月に予定されている第三次報告へ向けての検討課題として小学校での英語教育の在り方があげられている。「英語活動」ではなく「英語教育」と明記されており、これが実現の方向へ動けば、小学校中学校共に今までとは異なる対応を迫られることになろう。このような中であっては次のような視点が必要となってくるのではないだろうか。

- ・小学校で英語を取り入れるのならそのぶん何を減らすのか。それをフォローアップするカリキュラムを小学校のみならず中学校でも考えていく必要があるだろう。
- ・過渡期と安定期を区別して考える必要がある。今でも小学校で英語活動を行うとき、開始時期には喜んで英語活動に取り組んでいた児童が学年が上がるにつれて意欲を失っていくということがある。開始当初は珍しさもあってどのような活動も新鮮に取り組んでいたのが、経験が増えるにつれ「物足りなく」なっていくというのは中学校でもよく見られる現象である。次第に自己表現活動への欲求が高まっていくのは、学習を進め、深めたりする中でごく当然のことである。これを保障する学習活動を提供することが肝要である。小学校で英語が導入され、新鮮な気持ちで児童が学習にあたる一方、新しいカリキュラムへの移行期ならではの混乱も起きやすい「過渡期」と、小学校英語が軌道に乗り、一方では児童の「次への欲求」に十分対応できない場合が起こりうる「安定期」には、準備すべき学習内容も自ずと変わってくる。これを見越して10年くらい先を見越した「小学校英語」の段階的なカリキュラムを作っていく必要がある。
- ・スムーズな接続と適切な段差の両方が必要である。現在は「中1ギャップ」の解消が叫ばれ、小中のスムーズな接続にばかり目が向けられがちであるが、その一方で「通過儀礼」として中学校進学を果たす役割の大きさも見過ごしてはならないだろう。スムーズな接続と共に「適切な段差」を小中間では敢えて設け、そこをうまく乗り越える支援をしていくことも、中学校教員としては大切にしていきたい。

「教育改革」の名のもと、様々に論議されている小学校英語と中学校英語ではあるが、子ども達が人と人との関わりの中で幸せに暮らしていくための力を身につけるといふ原点を見失わず、これからも実践と研究を続けていきたい。

参 考 文 献

「社会総がかりで教育再生を～公教育再生に向けた更なる一步と「教育新時代」のための基盤の再構築～一第二次報告一」(2007), 教育再生会議<<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouiku/houkoku/honbun0601.pdf>>(2007/06/03アクセス).

「小学校英語活動実施状況調査(平成18年度)」(2006), 文部科学省

<<http://www.mext.go.jp/b-menu/houdou/19/03/07030811/001.htm>>(2007/05/19アクセス).

「小学校における英語教育について(外国語専門部会における審議の状況)(案)」(2006), 中央教育審議会 <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/015/06032708/003.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/015/06032708/003.pdf)>(2007/05/19アクセス).

『第1回小学校における基本調査(教員調査)』速報版(2006), Benesse教育研究開発センター.

<[http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo\\_eigo/2006/sokuho\\_pdf/syo\\_eigo\\_soku.pdf](http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2006/sokuho_pdf/syo_eigo_soku.pdf)>(2007/05/19アクセス).

(なかがま ともこ 英語科 nakagama@edu.shimane-u.ac.jp)